

## 取組の「本質」を考えたい

令和元年のダイナミックチャレンジについて話してきましたが、少しずつ、新たな創意工夫の取組が提案されてきてうれしく思っています。

新たなことは、それなりの学びと企画力が必要となり苦勞を伴いますが、そうしてこそ、児童の課題も解決に向かうでしょうし、何よりも教員としての資質の向上に繋がると思います。

今、面談を行っており、何人かの先生にはお話をしましたが、学校の教育活動を考えるとき、最も大切なことは「本質を考える」ことだと思っています。

なぜ、その活動をするのか、何のためにするのか。日々の全ての活動で、常にこのことを考えてほしいと思います。

例えば、年度初めての行事である「入学式」もです。私が教務主任になったとき、毎年恒例のこの行事も、一から考え直し、その学校だからこそその入学式に年々バージョンアップしていきました。

学校には大変多くの教育活動があり、教職員が分掌しています。その一つ一つを、一人一人が、「なぜそれを行うのか、その目的は何か、それを達成するための最善の手立てはどうあるべきか。」をしっかりと考えてほしいと思います。

校務分掌は、希望というより、学校全体のバランスを考慮した上での分掌です。思いがけない分掌もよくあることでしょう。しかし、折角のチャンスです。その1年間は、関連書籍を購入しまくってその業務の本質を学び、スペシャリストになるくらいの気概が欲しいものです。

例年通りの計画をどうにかこなすだけの提案、効率のよさを第一にする改善ではなく、「本質」を考え、子どものための取組の改善を進めていきましょう。

私がこのように考えるようになったのは、35歳のときに着任した旧阿東町の三谷小

学校勤務からです。

特に、学校統合した年の校長先生からは、教務主任として禅問答のような投げかけを受け、それは大変な1年間でした。

4月に新しく着任した校長先生は、「最後のこの1年は、『有終の美と転生への期待を育む教育』を行ってほしい」と言われました。ただし、その内容については一言も説明はありませんでした。

それから1月あまり、「有終の美と転生への期待とは」という問いの答えについてずっと悩み続け、ようやく連休明けに基本方針を提示し、統合の1年のスタートを切りました。

その間は、それまでの4年間の三谷小の取組、児童の課題、統合に向けた課題、教務としての取組について、それは真剣に悩みました。

有終の美はともかく、転生の期待をどう育むのか。出した答えは、「それまでの取組を有終の美と言えるまでに昇華させ、かつ児童の「主体性の欠如」という小規模校の児童に足りない部分をできる限り補うことが、転生の期待を生むだろう」というものでした。

それまでも相当本気で取り組んできた「ふるさと体験学習」を、最大限、主体的に取り組む方向に変えたり、地域やPTAの関わり方を見直したりした結果、最後には児童の中から「今年はこんなすごいことができた。4月からの新しい学校は私たちが作るんだよね。」という声が起こりました。

この1年間の取組は、今の私の教育観の根源にあります。「本質を考えること」もこの校長から学びました。

